

算命学中庸

【初年】 39 回目

39 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【旺相休囚死法】

【初年】 39 回目 【旺相休囚死法】 01

□ 旺相休囚死法（おうそうきゅうしゅうしほう）

38 回目の授業は陰占における“人物の場所”でした。

年干は父親の場所だとか、日支は配偶者の場所だとかがありました。

ここで学びは人物をつかひまして、一家族のチカラ関係を観る技法です。

「おう旺とそう相ときゅう休としゅう囚とし死」です。

人物をつかった占いの技法は、算命学にはいくつもあります。その最初の技法が「旺相休囚死法」です。

一家のなかのチカラ関係をみる

宿命をだしてみたら「私の宿命では、一家のなかで母親が強い存在になっているとか、自分は弱いとか、自分より、夫のほうがもっと弱い」とかです。

〔たとえば〕誰が強くて、誰が弱いか、一家のなかでの権力というか、発言権とといいますか、そのようなチカラ関係をみるのが旺相休囚死法です。

この技法をつかいますと……、

〔たとえば〕結婚前に相手の宿命をみて、この人は亭主関白になるなとか、この女性と結婚すると夫よりも強くなってしまおうとか、あるいは、家族全体をみたときに、一家のなかでは子供が一番強くて、子供に振り舞わされるようになってしまおうとか、そういう占いができます。

☞ おうそうきゅうしゆうし「旺相休囚死」のチカラの強さは“5段階”の順位があります。

そのチカラの強弱の順位の見つけるわけです。

まず宿命を出して、この宿命は父親が『旺』^{おう}になっているとか、母親が『休』^{きゅう}になっているとか、自分が『死』^しになっているとか——そのように強さの順番を見ていきます。

そのとき『旺』が一番強くて、『死』が一番弱いのです。

『死』といっても“死ぬ”という意味ではありません。この場合は、単に“チカラが弱い”という意味です。

ただし、強弱を見るときには、一つ大事なことがあります。世の中でも——あの人はすごく強いとか、あの人は弱いとか、そういう言い方をすることもありますよね。

〔たとえば〕有名人で強い人を挙げてみますと、安部晋三さんは総理大臣ですから、権力は一番強かったです。この人の権力は強いですから、**強い**とします。

安部晋三 —— 強い

私はテレビを観ないので、最近、和田アキ子さんテレビに出ていますか？ **強い**姿ありますよね。和田アキ子 —— **強い**

その例は、なんでもよいのですが、安部さんは総理大臣で強くて、和田アキ子さんも強いとしたら、阿部さんと、和田アキ子さんでは、どっちが強いのと、訊かれたら、どちらが強いでしょう——。

一方は政治家で、一方は歌手です。

これは分野が違いますから、どっちが強いとは言い切れないはずです。おなじ土俵ではないのです。

〔例え〕を換えます。

スポーツの世界で例えたほうが、わかりやすいでしょう。

相撲の白鳳は、現在、強い横綱です。

一番強い力士 —— 白鳳

〔たとえば〕野球で考えてみますと——、

野球の歴代で、日本人ではイチローなのだそうです。

大リーグ新記録をいくつも打ち立てて、すごく強い打者です。

野球 —— イチロー

そうしますと、白鳳とイチローと、どっちが強いかというと、一方は相撲、一方は野球選手

白鳳 —— 相撲

イチロー —— 野球

相撲と野球なので、これも分野が違いますから、どっちが強いのか、それは原則としては比較できないはずです。

分野が違うので比較できない

二人で相撲を取れば、当然白鳳が強いでしょうが、二人が野球のバッターとして戦ったら、イチローの方が断然強いはずです。これも分野違いで比較できないのです。

では、おなじ分野であれば、比較できるのか……と考えます。〔たとえば〕イチローさんと王貞治さん

イチロー

王貞治

どちらも野球選手です。どっちが強い選手でしょうか？
どっちが選手として上ででしょうか？

おなじ野球の世界ですが、時代が違いますので、比較出来ないはずです。

時代が違うので比較できない

昨今の野球と、王さんが活躍した時代とでは、バットの材質からして違います。スパイクの作りも材質も、グラウンドの整備状況も、そして、戦う選手達のレベルも全然違うわけです。

そうであるのに——いつもそのような^{くら}^{ごと}比べ事をやりますよね。〔坂本龍馬が生きていたらとか——〕

しかし、昔の記録と、昨今の記録とでは、時代背景が全く違いますから、比較対象に本当はならないはずですよ。

そうではありませんか？

相撲も——戦前の横綱双葉山が 60 何連勝しました。とかいいますが、戦前の 60 何連勝と現在の^{いま} 20 連勝とでは、どちらのほうか“価値が高い”それは比較できないはずですよ。昔と現在では、からだの大きさも違います。

それゆえに、時代背景が違ってしまえば、本来は比較できないはずですよ。

オリンピックなどでも〔世界新記録だとか〕〔記録は破れませんでしたとか〕よく聞きますが、何年か前の記録と現在の記録を、そのまま比較するのはどうでしょう。

とはいっても——競技ですから、比較することで、視聴者の観戦感覚を煽^{あお}って、引き出しているのでしょう。

実際には競技場が違いますし、そのときの風向きとか、競技者をささえているすべてが違います。

昨今の競技場は、記録が出やすいように、グラウンドを造っていますから、厳密に言えば、単に記録だけで比較すること自体おかしいと考える人もいるでしょう。

そうしますと、分野が違ってても比較できませんし、時代が違ってても比較できないわけです。

そうであるなら、分野も基準を決めて、時代もきちんと基準を決めて、野球であれば、どっちが打率を残せたかということで比べたら、それは比較できるでしょう。

まったく同時代に、おなじ大リーグで活躍して、どっちの選手がたくさん打ったのということであれば、それは結果がでますので比較できるはずですが、しかし、現在の^{いま}

世代の競技者と、昔の競技者とでは、比較できないはず
です。分野が違ってても比較できないはずです。

皆様は、いかがお考えになりますでしょうか……。

☞ 十干・十二支の勉強をしましたときに：

9回目【六十干支】 07 ⇒ 自然界は空間と時間で成立っている

十干 …………… 空間〔五行を陰陽に分けたもの〕

十二支 …………… 時間〔1年を十二区分したもの〕

十干は空間、十二支は時間をあらわすということでした。

分野は空間をあらわします。〔空間が違うので比較できない〕

空間

時代は時間をあらわします。〔時間が違うので比較できない〕

時間

強弱を語るには、空間と時間が共に必要である。



算命学の原則

強弱を語るには、空間が欠けても語れませんし、時間が欠けても語れないのです。

両方とも、きちんとした基準がなければ、強い・弱いを語れないのです。

⇒ 算命学は「丙火」を太陽にたとえますが、「丙火」だけでは「丙火は強いですか」「丙火は弱いですか」といわれても、語ることはできません。

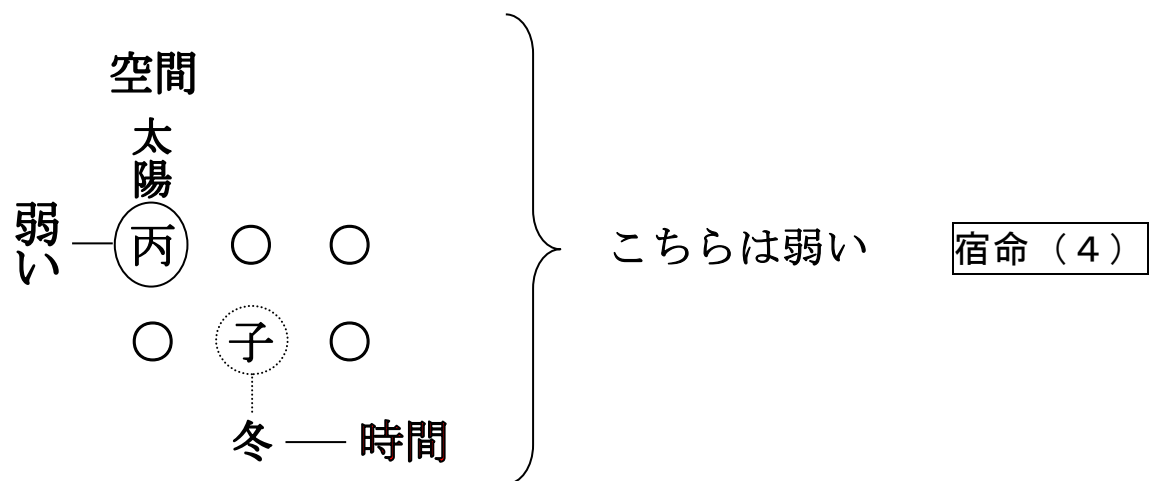
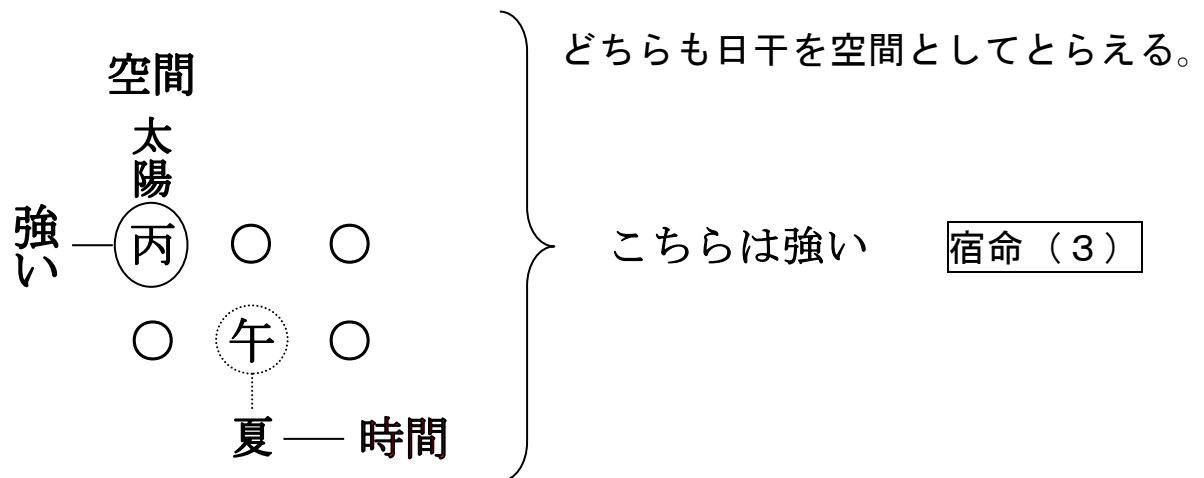
そこで具体的に命式をつくって考えましょう……。



宿命 (1) のように、午月の丙火です。と、時間が加われば語れます。(午) は夏の十二支ですから季節は夏です。

宿命(1) 夏の太陽です。 **宿命(2)** 冬の太陽です。

「夏の太陽と冬の太陽では、どちらが強いですか」と、訊かれたら——これは時間と空間にキチンとした基準がどちらにもあります。ゆえに強弱を語れます。



(月支) は季節を表す場所ですが、この場合は、時間をあらわす場所ともいえるわけです。ここでは(月支)が時間をあらわし、日干「丙火」を空間としてとらえます。

このように、強弱を語るには、空間と時間が共に必要です。どちらが欠けても、強弱を語れないのです。

〔たとえば〕ネズミ月（子月）に生まれました。

「冬に生れた人は、強いですか……？」といわれても、丙火（太陽）という空間がなければ〔ネズミ月が強いのかどうか〕〔冬が強いのかどうか〕と訊かれても、比べようがないわけです。

〔たとえば〕丙火（太陽）がなくて、「冬生まれの人と、夏生まれの人とでは、どちらが強いですか……？」と、訊かれても、これも答えようがないですよ。

しかし「夏の丙火と、冬の丙火とでは、どっちが強いのですか……？」と訊かれたら、これは答えが出せます。

「夏の太陽は強いけど、冬の太陽は弱いです」と、答えが出ます。

このように「十干」と（十二支）のどちらが欠けても、強弱は語れないのです。

「十干」と（十二支）の両方揃えば、つまり空間と時間の両方が揃えば答えを出せます。

算命学では、このようにして強弱を測っていくわけです。
強弱を比較するわけです。

〔十干と十二支のどちらが欠けても強弱は語れない〕

これは算命学で、強弱を見る・測るときの大原則です。

「旺相休囚死法」のほかにも、強弱を見る技法はありますが、それらの全てがこの原則にのっとっています。

⇒ 具体的に、ご自分の宿命を観て、どの程度強いのか、どの程度弱いのか、父はどうなっているのか、子供はどうなっているのか、配偶者はどうなのかと——それらを占うのが「旺相休囚死法で」す。

ただ〔強いとか〕〔弱いとか〕ではなくて、おなじ強いのも、一番強い『旺』のランクになる場合もあれば……
『相』の順位になる場合もあります。

弱いということでは——『囚』のランクも弱いけど、
『死』の順位はもっと弱いです。というように、5つのランクに分類します。

⇒ 5つのランクに分類するには：

「年干支」「月干支」「日干支」の人物の場所が必要で、
「十干」と（十二支）の五行も必要です。

❖ 人物の場所

❖ 「十干」（十二支）の五行

） ぜひ覚えてください

三柱（さんちゅう）⇒「年干支」「月干支」「日干支」三本の柱を意味します。

⇒ チカラの強弱をみるには、空間と時間の両方が必要である。

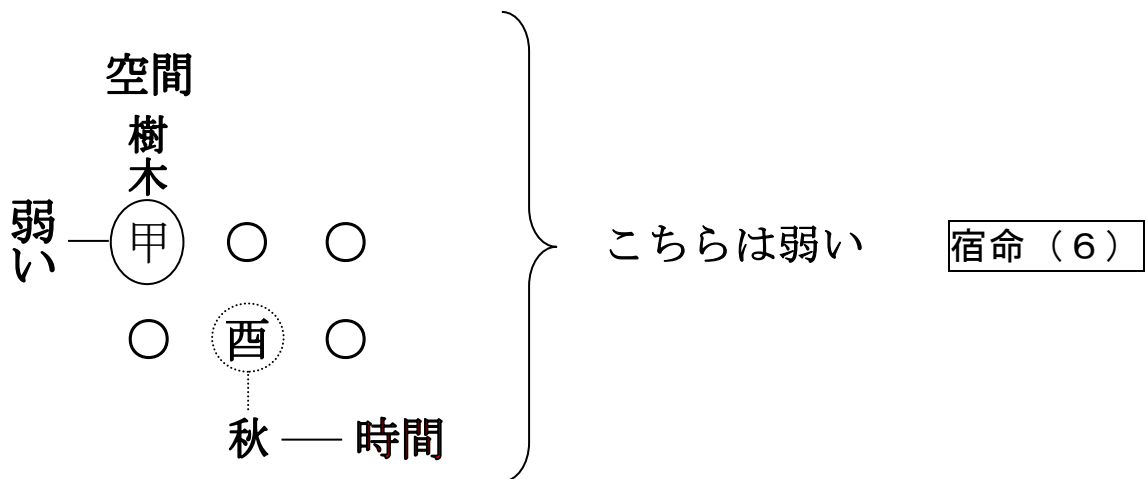
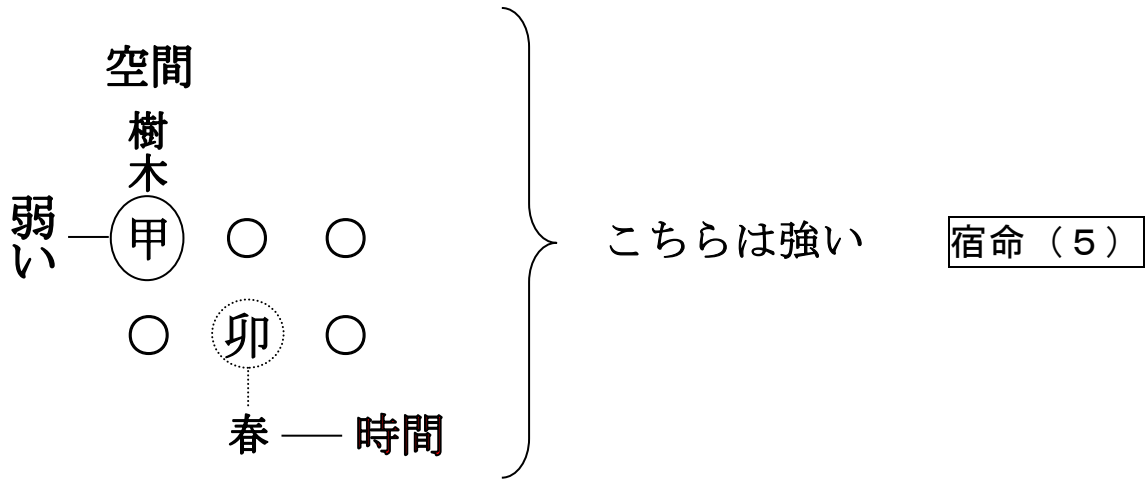
マラソンにしても、^{いま}現在の時代と、アベベが^{はだし}裸足で走った時代とでは、シューズにしても、トレーニング方法にしても、科学的な分析方法も、時代が違いますから、おなじ基準での判別はできないと考えています、といたしました。

⇒ 旺相休囚死法においては、空間と時間がともに揃わ^{そろ}ないと、強弱の判別はできないのです。 ➡

そこで、宿命（1） 宿命（2） と、宿命（3） 宿命（4） の命式に当てはめて考えたわけです。

もう一つ作ってみましょう…… ➡

☞ もう一つ作りますと：



宿命(5) のように、卯月の甲木の人がいたとします。

これは春の樹木です。

でも、おなじ日干「甲木」の人でも、**宿命(6)** のように

酉月の甲木の人物がいたとしたら、春の樹木の宿命と、

秋の樹木の宿命とでは、どちらの樹木に勢いがあるって、

強いのかといえば、春の樹木のほうが勢いもあるし、成長しますから**強い**わけです。

秋の樹木は、秋は成長が止まってしまい、枝葉を落として枯れたような姿になります。そういう季節の樹木ですから、樹木そのものに勢いがなくて**弱い**です。

このように、比較することが出来ます。

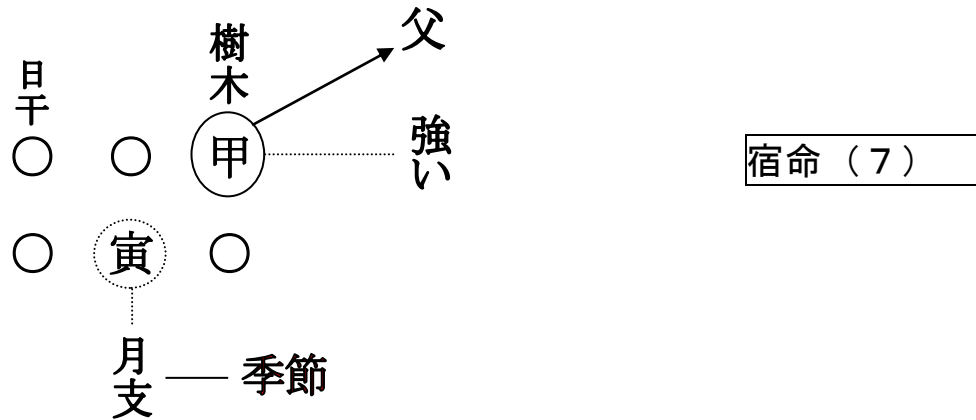
宿命(1) から **宿命(6)** の命式では、理解しやすいように……「日干」が太陽の場合とか、「日干」が樹木とかの場合を書きましたが、この話は日干以外にも、当て嵌めることができます。

つまり、この“甲木”は宿命の「年干」にあるかも知れないし、「月干」にあるかも知れませんし、(年支)あるいは(日支)の二十八元のなかにあるかも知れません。

甲木がどの場所にあっても、春の樹木なら勢いがあるって強いです。というふうに論じることができるわけです。

【たとえば】 年干に甲木がある人がいたとすれば ➡

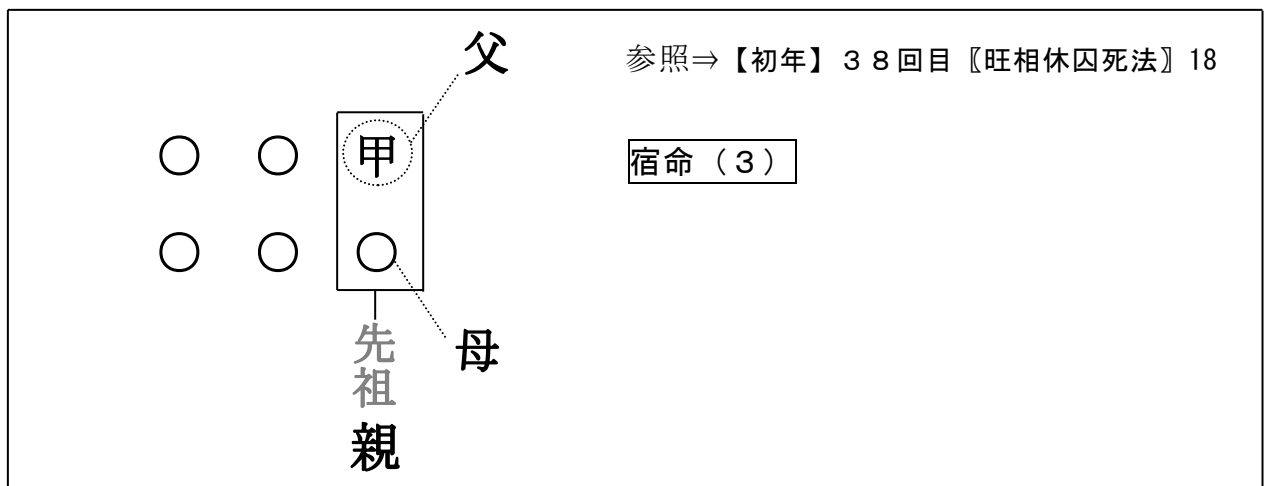
〔たとえば〕 甲木が年干にある人物がいたとすれば……



宿命 (7) 父親は (寅月) の “春の樹木” ですから、この甲木強いですよ。と、読めるわけです。

年干は父親の場所です。そうしますと、「日干」は書かれていませんけど、この人物の場合は、お父さんは強い人ですね……という占いになっていくわけです。

(月支) を基準にして、ほかの五行の強弱をみる技法があります ➡



⇒ (月支) を基準にして、ほかの五行の強弱を見る技法
それが「旺相休囚死法」です。

月支が、春とか、秋とか、夏とか、冬であったりするわけですが、(月支) を基準にして考えていくのです。

月支を中心(基準)にして、この人物の場合は「日干」が強いですよとか、この人は「月干」が弱いですよとか、

(年支) は中位^{ちゅうくらい}の強さですよ、とかを読んでいきます。そのときに(月支) を中心にして、つまり基準にして、ほかの五行の強弱を見る技法が「旺相休囚死法」です。

⇒ 理解しやすいように、**宿命(5)** **宿命(6)** を書きました。**宿命(6)** については、[秋の樹木と春の樹木では、どちらが強いのか] と、いう表現をしましたが、これはただ単に“春の樹木だから強い” と、いう表現ではなくて、もう少し明確な基準があります。

その基準は(月支) と、どのような関係になっていると“強い” とか、どういう関係になっていると“弱い” とか、どのような関係だと“中位^{ちゅうくらい}” だとか、そういう基準があります。それが「旺相休囚死法」の基準になります。

☞ おうそうきゅうしゆうし 「旺相休囚死」のチカラの強さは“5段階”の順位があります。(このように2ページの下から3行目に書きました)

旺相休囚死では、[強い] [弱い] という段階を五段階に分類しています。

『旺』 1番強い

『相』 2番

『休』 3番

『囚』 4番

『死』 5番で一番弱い

強弱の順位は5段階です。

宿命の月支は季節をあらわす場所です。

月支の十二支は、その宿命が置かれた時間の性質を意味します。

☞ このページを縮小すると文字が小さくなります。100%がお勧めです。

参考資料

【旺相休囚死法】

算命中庸学

旺相休囚死法 …… 季節の時間と空間の力関係

月支 季節	寅 卯	午 巳	辰戌未丑	申 酉	子 亥
旺	木性	火性	土性	金性	水性
相	火性	土性	金性	水性	木性
休	水性	木性	火性	土性	金性
囚	土性	金性	水性	木性	火性
死	金性	水性	木性	火性	土性

旺…時間と比和となる空間（違和感がなく一体となれる。空間が

時間と共に持てる力を存分に発揮できる）

相…時間に生じられる空間（空間は時間の助けを得て力をつけている状態）

休…時間を生じる空間（空間は余力を使ってしまっている状態）

囚…時間に剋される空間（空間は時間の助けを得られない上に傷めつけられる）

死…時間を剋す空間（空間が時間の味方を得ることができず最も弱くなり力を失う）

🔍 **参考資料** 【旺相休囚死法】を参照ください。

『旺』時間と比和となる空間

旺は時間と比和となる空間との記述があります。

旺は時間と比和となる空間というのは、言い換えれば、この場合は（月支）と比和となる空間と考えてもよいのです。この場合時間は（月支）を指しています。

『相』時間に生じられる空間

（月支）から生じられる空間があれば、それは『相』になります。ということです。

『休』『囚』『死』もおなじく、時間というのは（月支）指しています。

📌 つぎのページから「旺相休囚死法」の一つ一つを説明
します。

そのときに、目で追って、読むだけではなくて、ここに
書いてあるのとおなじように、宿命の干支・五行などを
ご自分でルーズリーフに書くことをお勧めします。

そのときに、ご自分の記憶にとどめるような事柄があれば、書き加えるとよいですね。

このことは算命学の勉強全体にいえます。

干支に慣れますし、実際に占うようになるときに役立ち
ます。

勉強の記述は、ノートより、ルーズリーフ用紙をお勧め
します。ただし、ノートと違ってバラバラになる可能性
がありますので、必ず、用紙にタイトルとページなどを
書き込むとかして、管理するとよいでしょう。

これは一つのやり方ですから、方法はご自由です。

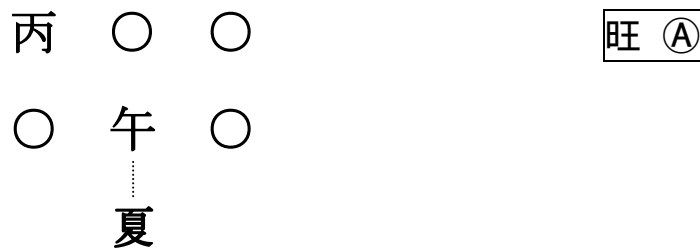
実際に占うときは、宿命の干支、人体図を読み解くよう
になるわけです。それゆえ、干支・命式などの読み方、
書き方に慣れることが必要です。

⇒ 【旺相休囚死法】 一つ一つを説明していきます。

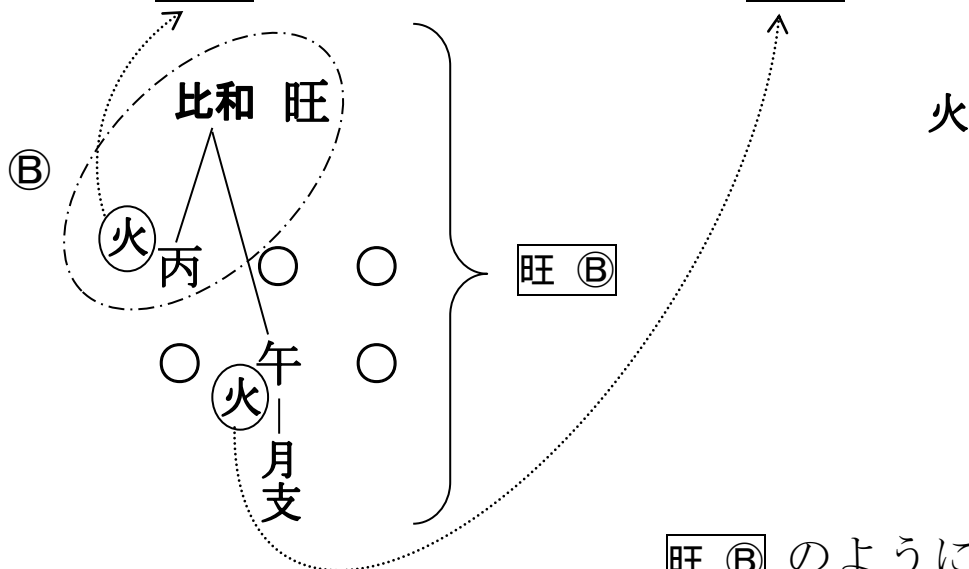
『旺』 —— 月支と比和になるもの

月支と比和になるものがあると、それが旺になります。

①



旺 ① のように、午月の丙火になる宿命の人がいたら、真夏の太陽なので、この丙火は強いです。という言い方をしましたが、旺 ① を「旺相休囚死法」で、より綿密にいいますと……日干は丙火という火性で、月支も午火という火性です。



旺 ② のようになります。

⇒ **旺** を五行で考えると、日干「丙火」は、月支（午）とおなじ火性ですから **比和** になっています。

旺 のように、（月支）と『比和』になるものが『旺』になるのです。 **丙火は旺**

このように考えていきます。

ここでは“夏の太陽だから強い”という意味のほうが、理解しやすいとおもいますが、（月支）と比和になるものが『旺』になります。これは決まり事です。

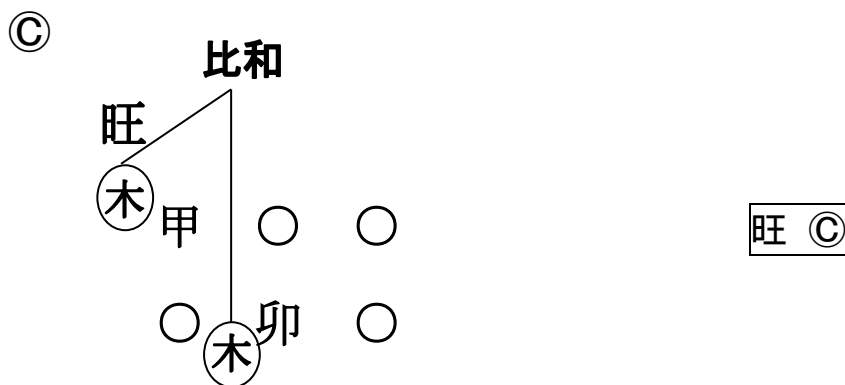
「旺相休囚死法」で決まっているのです。

つまり（月支）が午火という十二支になっているのを、十二支盤で見ると、午は（巳 午 未）のなかにあります。午は夏の十二支であり、しかも中心に位置しています。月支が（午）ということは、火性のチカラが強い季節です。という意味になります。

季節は夏で暑いから火性のチカラが強い、と考えるわけですが、（月支）にあるのが夏の十二支の（午火）だということ自体、火性が強い季節という意味なわけです。

それゆえに、その強い（月支）と、おなじ火性になるものが、宿命にあれば比和で『旺』になります。

一番強いものになるわけです。



卯月の甲木は、春の樹木でどんどん成長する勢いがある時期ですから“この樹木は強い”という言い方をしましたけど——もう少し厳密に言えば、（月支）が卯木という木性で、日干も木性なので、月支と比和になっていますから、この甲木は『旺』になるわけです。

月支（卯木）と、日干「甲木」は比和です。

月支が卯月という、木性の月に生まれたということは、卯月ということ自体、自然界のなかで、木性のチカラが強い季節です。という意味があるわけです。それゆえに、月支と比和のものがあれば、それは『旺』になります。

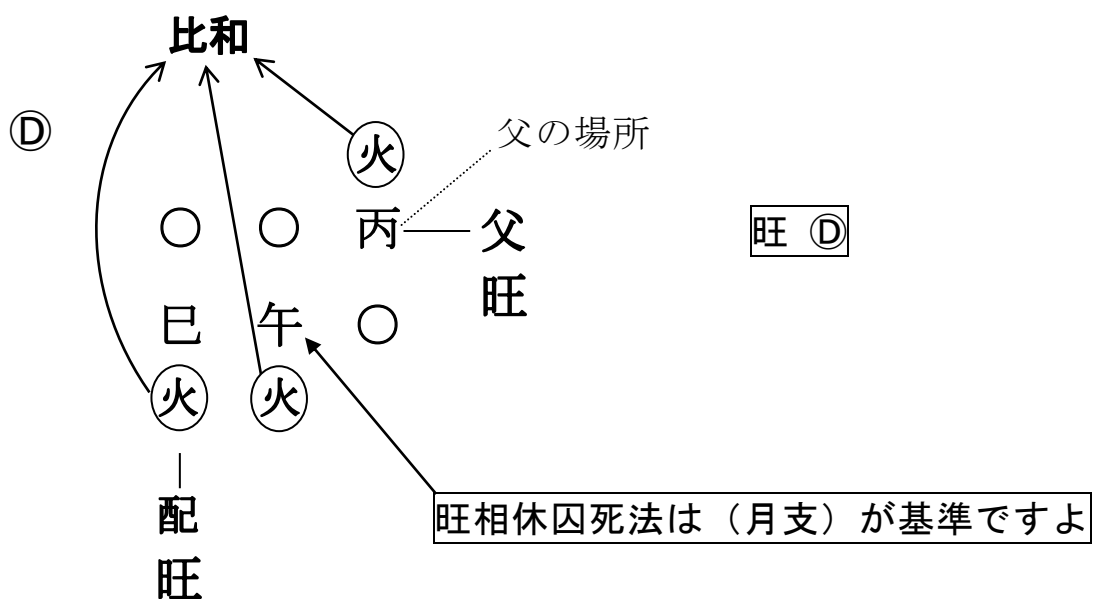
👉 【初年】 8回目【十二支と陰陽論】 01 と 02 ページに十二支盤の図があります。

👉 このような図形とか表はプリントして、ルーズリーフに収めておくとすぐに見ることができます。

「インデックス（見出し）」シールを貼っておくとよいでしょう。

👉 話をもどします。

月支と比和になるものが、どこにあるのかわかりませんから、[たとえば] 旺 ㊦ のように、月支は午月の火性で年干に丙火の(火)があり、日支にも巳火という(火)があると、月支と比和になっているのは、年干と日支です。



年干は、父親の場所ですから、父は『旺』になります。

日支も火性ですから、この火性もすごく強いです。

日支は配偶者の場所なので、配偶者も『旺』になります。

☞ 実際には、「日干」が十干の何なのか、何の五行なのかによりますが、年支を○にして省^{はぶ}きます。

そうしますと、**旺** ㊦ は、午月の宿命で、年干も火性で、日支も火性になっていて、(月支) と年干は比和です。

そして(月支) と日支も比和になっていますから、父親と配偶者が『旺』になります。

すごく強いです……ということになります。

具体的な観方は、^{あと}後でご説明しますが、「この人物は父親と配偶者には、逆らえない人になります」といえるのです。

父と配偶者が強いわけですから、この二人には逆らえません。というふうに占いをしていくようになります。

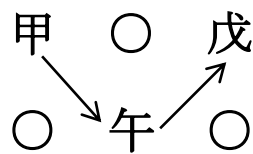
「日干」に限りませんよ。(月支) と比和になるものが、^{どこ}何処かにあったら、そこは『旺』になるということです。

⇒ 2番目に強い『相』^{そう}の説明に入っていきますが——
 続けて、3番目に強い『休』^{きゅう}も一緒に説明します。

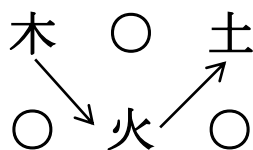
『相』 —— 月支に生じられるものです。

『休』 —— 月支を生じていくものです。

〔たとえば〕宿命(1)のような宿命の人がいたとします。



宿命(1)



宿命(1) 五行

宿命(1) は (月支) は午火、「日干」は甲木で木性です。

「年干」に戊土があって土性です。

そうしますと、宿命(1) 五行 のように、「日干」木性は
 (月支) の午火に対して、(木→火) と相生になります。

「年干」の戊土と（月支）の午火とは（火→土）と、これも相生になります。

（木→火）と、木が燃えて火になる相生、
（火→土）と、火が燃え尽きて、土になる相生、
このように、甲木と戊土は、（月支）に対して、どちらも相生になっていますけど……相生の向きが違います。

① 「日干」甲木が、（月支）の午火を生じていく相生。

（月支）が、日干から助けられる姿

② （月支）の午火が、「年干」戊土を生じていく相生。

（月支）が、年干を助けに行く姿

相生は、助けるような関係だというのが基本です。

相生には“助ける”という意味があるわけです。

そこで、甲木と戊土を比較すると……、

甲木は（木→火）と、自分のほうから、月支を助けに行っています。

戊土は月支から、（火→土）と助けてもらっています。

甲木と戊土、この2つを比較したとき、どちらのほうが重荷で大変だと思いますか——？

甲木と戊土では、どちらが疲れてしまうと思いますか？

(火→土) と助けてもらっている戊土と、(木→火) と自分から助けに行く甲木とでは、どちらのほうが力を消耗しますか？

そう、甲木のほうですよ。

戊土は月支から、(火→土) と助けてもらっているわけですから、戊土は自分のチカラを使っていないわけです。

ところが、甲木は自分自身が(木→火) と、月支を助けに行くわけですから、甲木は疲れてしまいます。

(木→火) と、月支を助けるためにチカラを使ってしまうことになります。

それゆえに、この場合は、戊土のほうが強いわけです。

つまり、甲木のほうは、チカラを消耗して疲れてしまうので、少し弱いなど考えるのです。

これは言葉で表現すると、つぎのようになります。

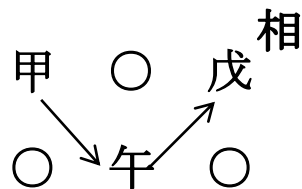
『相』 —— 月支から助けてもらった分だけ強くなる

このように考えますので、おなじ相生でも戊土のほうは

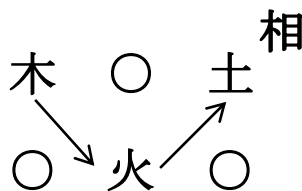
(火→土) と、助けてもらった分だけ、得たようなものです。自分のチカラを使わなくて済むので (火→土) と助けてもらった分だけ強くなります。

余力があるといってもよいですね。

ここでは戊土のほうが強いです。となりますから——
戊土は『相』になります。



宿命 (2)



宿命 (2) 五行

おなじ相生でも『休』は (木→火) と、自分のほうから月支を助けてあげるわけです。

休 —— 月支を助けていくため、その分チカラを使ってしまい、

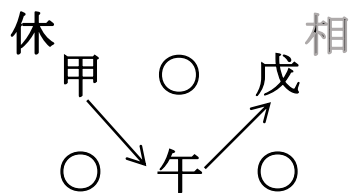
その分チカラが弱まる

というのが『休』になります。

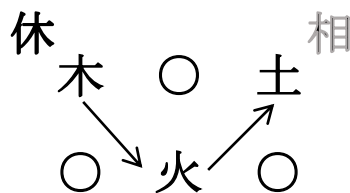
甲木は（木→火）と、月支を助けていくのですが、相手を助けてあげる分だけ、自分はチカラを使ってしまいますから、その分チカラが弱くなるはずです。

それゆえに、おなじ相生でも、**宿命（3）**の相生のほうが少し弱いのです。

それでこちらを『休』と考えています。



宿命（3）



宿命（3）五行

（火→土）と生じてもらおうと、その分だけ強くなりますが、逆に（木→火）と自分から相手を生じると、チカラを使うために、その分だけ自分は弱くなるのです。

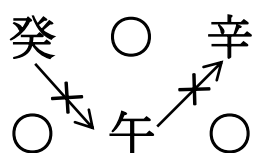
このような考え方を理解なさっておいてください。

☞ 運勢を観るときに、こういう考え方を応用する方法も出てきます。

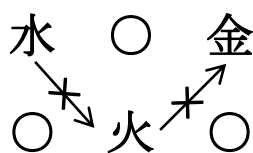
⇒ 相剋の関係になるものが、2つ残っています。

『囚』と『死』です。

十干の干はどの場所にあっても構わないのですが……、
わかりやすく「日干」と「年干」をさっきとおなじ場所
で書きました。



宿命 (4)



宿命 (4) 五行

宿命 (4) のように、(月支) が午火という火性の月になる
ときに、「日干」が癸水という水だとします。

そして「年干」に辛金があります。

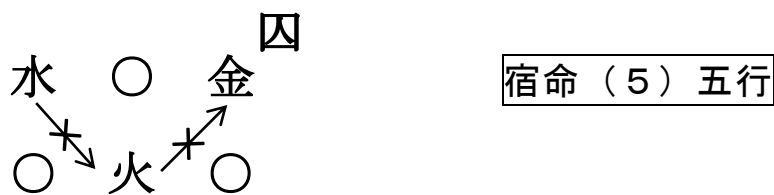
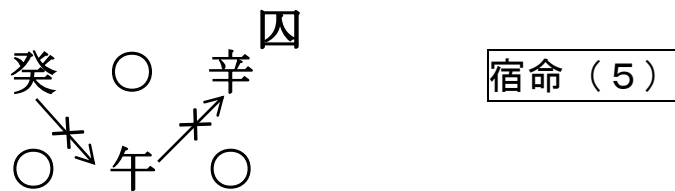
そうしますと……

(月支) は午火という火性ですから、「日干」は (月支)
に対して、(水→×火) と相剋になっています。

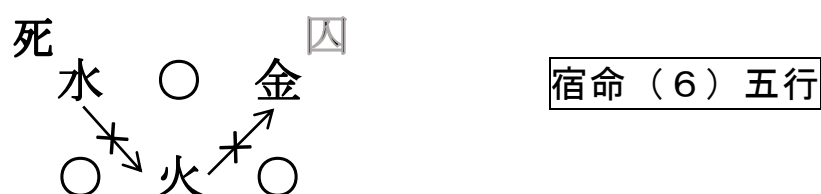
年干は (火→×金) で、これも相剋になっています。

本来は……（水→×火）と水が火を消してしまうとか、
 （火→×金）と火が金を溶かしてしまう、相手をやっつける。
 そういう関係が相剋です。

『囚』は（月支）に剋くされるもの



『死』は（月支）を剋くすもの



宿命(5) そして **宿命(6)** を金性の立場で考えていきますと、月支は火性です。

「年干」の辛金は(火→×金)と、月支からやっつけられていますから、辛金は弱くなってしまいます。これは理解しやすいです。火性が金性を溶かしてしまうので、金性は溶かされて、チカラが弱ってしまいます。このように考えます。それで辛金は弱いわけです。

ところが……(水→×火)と、月支を剋くしていく癸水のほうが、もっと弱いのです。

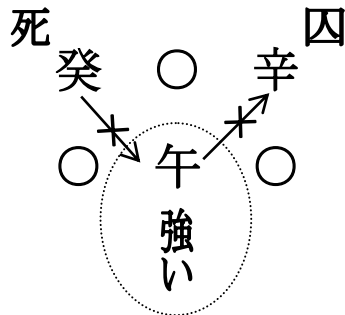
ここには、算命学の考え方が横たわっています。

「年干」の辛金は(火→×金)と、月支から剋くされていますから、この辛金は弱くなります。

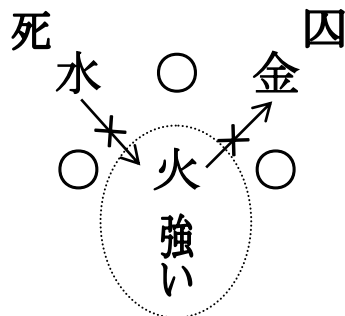
ここでの考え方は……強いものから(火→×金)とやっつけられるのであれば、手向かいしないで(火→×金)と“やられっぱなしのほうがまし”という考え方です。無抵抗です。

月支が午火で夏だということは、この季節は火性が一番強いわけです。それは最初から決まっていることです。

ですから、(月支) とおなじ火性のものが『旺』になるわけ
 けです。



宿命 (7)



宿命 (7) 五行

それゆえに、月支とおなじ火性のものがあれば『旺』に
 なるわけです。

午月は夏なので、火がすごく強いということは、最初か
 ら決まっています。

その強い火性を、(水→×火) と自分からやっつけようと
 立ち向かって行くと、かえって自分が受けるダメージが
 大きくなりますよ。と考えるのです。

最初から火がすごく強い季節だということは決まってい
 るわけです。その火炎から (火→×金) と傷めつけられる

ことは当然なわけです。それなら、むしろ無抵抗でいたほうがましです。そうしているわけです。

この強い火に対して、自分から（水→×火）と、火炎のなかに飛び込んでいくのは、バケツで水を掛けるようなものです。水は蒸発して無くなってしまいます。

〔飛んで火に入る夏の虫〕で、自分が受ける損傷のほうが大きくなってしまふ。ということです。

こういう考え方をするわけです。

この事象を文章にしておきますと：

囚 —— 強い月支に剋くされるのなら、剋くされっぱなしになるほうがましである。

死 —— 強い月支に対して、自分から立ち向かっていくと——
より大きな損傷を受ける。

この考え方は、一般論でさまざまに応用できます。

人間関係であれば、〔たとえば〕強い人がいるとします。

会社でいえば社長でしょう。会長がいる場合もありますが、それは外して社長が一番偉いとします。

その社長から（火→×金）とやっつけられる、あるいは、怒られるのであれば、口答えしないで、怒られっぱなしになっていたほうが、少しはましなはずです。

その社長に、自分の方から（水→×火）とケンカを仕掛けてしまうと、かえって自分が受けるダメージが大きくなります。

これは戦争にしても、おなじようなものです。

アメリカがイラクと戦争しまして、フセイン政権を倒しました。イラク側はほとんど抵抗しなかったようです。

（火→×金）とアメリカが攻めてきたら、兵士も半分位は逃げてしまって——やられっぱなしになっているほうがダメージは少ないです。

おなじアメリカと戦争しても、かつての日本みたいに、日本のほうから戦争を仕掛けて、真珠湾を攻撃したとなれば、相手が強いとわかっているはずですから、自分の受けるダメージは大きなものになるわけです。

これは宿命に関係無くです。

そのように物事に当てはめて、この考え方を応用することができます。

『囚』と『死』はどちらも弱いのですが、『囚』のほうが『死』よりは少しましと考えています。

『死』のほうがより弱いです。

「旺相休囚死法」の順位・五段階は、このような観点によって決められたのです。

☞ 19 ページに **参考資料** 【旺相休囚死法】の表があります。

これは……（月支）生じられる場合だと『相』になります。（月支）に剋くされるものは『囚』です。

それらを表にしたものです。

ゆえに、実際に「旺相休囚死」を決めるときには、この5段階順位の法則を頭に入れてなくても大丈夫です。

この表を見ながらでよいのです。

〔たとえば〕（月支）が寅月・卯月の生まれの人で、宿命のなかに木性があれば、それは旺であり、火性があれば相です。水性だと休、土性であれば囚、金性だと死です。

それらの順位は、表を見ながら決めたほうが、間違いがないとおもいます。

☞ 強いとか、弱いとかですが、旺が1番、相が2番目、休が3番目となっていますが、この強さは“何についての強さを表しているのか”ということを知っておかないといけませんよね。

「旺相休囚死法」の強い弱いは、あくまでも（月支）に対して、強いか弱いかです。

月支が午月であれば、午月という月支に対してです。

〔午月の甲木だと休で3番目〕の強さです。

〔午月の戊土だと相で2番目〕の強さです。ということなので、あくまでも（午月という月支）を基準にして、甲木は休の3番目です。そういう意味を論じています。

☞ そうしますと、（月支は何の場所）なのかといえば、家系の場所ですよね。（月支）は家系の場所です。

月支 —— 家系

実際の占いでは、その人物の（月支＝家系）において、この甲木は休です。

その人物の家系において、戊土は相になりますよ。と、いうことを論じているわけです。

月支は家系の場所です。午月の丙火は強いといっても、それはあくまで、午月という基準において、丙火は強いです。という意味になります。

それゆえ「旺相休囚死法」は、あくまでも、家系のなかのチカラ関係を論じる技法です。

この力関係というのは、実際の占いにおいては、権力、あるいは発言権のようなもの、そのように考えておかれるとよいでしょう。

旺相休囚死法はあくまでも家系のなかでの力関係を論じる技法



権力・発言権

「旺相休囚死法」は、家系のなかにおけるチカラ関係を論じるものです。

いいかえれば、家系の外においてのチカラ関係を見ることはできません。

〔たとえば〕「旺相休囚死法」で、この人は『死』になりました。ということは……その人はあくまでも、月支において（家系において）『死』になりますから「弱いですね」という意味になるの

であって、家の外においては——強い人かも知れないのです。
そういう宿命も有り得ます。

家系（家）のなかでは、小さくなっているお父さんが、
会社に行けば、威張っているかも知れないですよ。ね。
会社で威張っている重役さんが、家に帰ると、奥さんに、
頭が上がらないとか、子供の言いなりになってしまうとか、
そういうことは有り得ます。

社会では偉いのに、家に帰ると、親のいいなりになって
いるとか、そういうこともあるかも知れないですよ。ね。

旺相休囚死法は（月支）を基準にしていますので、あく
までも“家系のなかでのチカラ関係”を論じるものです。

そうしますと、その人物はもともと性格的には、すごく
気が強い人かも知れないのです。

世の中・社会の場では、すごい気の強さを発揮するかも知
れないのです。

“でも……彼って、家のなかではこうなんですよ”と、
家のなかでのチカラ関係を知るのが旺相休囚死法です。

☞ もう 1 つ……ここで注意しておかなければいけないのは〔運勢がよい〕〔運勢が悪い〕それとは別のことです。

『旺』になっているから“家のなかで権力が強い”——だからといって、その人の運勢まで強いとは決まっていません。

逆に“家のなかでは小さくなっている”からといって、〔運勢がよくない〕〔運勢が悪い〕とは決まっていません。

家のなかではおとなしいけど、運勢はすごく強い、そういう宿命の人物も有り得ます。

運勢の良い悪いとは、全く別のことである

ということも、頭に入れておいてください。

〔たとえば〕自分の宿命出してみたら、『死』になっていても、1 番弱い、ああダメだ。と思わないでください。

「旺相休囚死法」は、運勢の良し悪しとは関係ないので、運勢とはまったく別のことです。

☞ 具体的に、旺相休囚死法を用いた観方を練習します ➡

⇒ 皇太子殿下であった令和天皇の宿命を書きました。

＊ 令和天皇 1960(s35)2-23

年干支から声に出して読んでくださいね。

	辛	戊	庚	
申	巳	寅	子	
酉	戊	戊		
	庚	丙		
	丙	甲	癸	

}

二十八元

宿命をだしたときに……庚金は金性だとか、子水は水性だとか、すぐわかるようになりましたか？

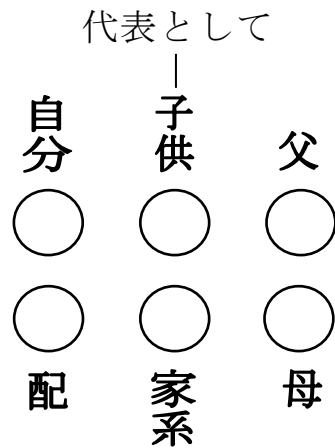
これから先、占うときには、十干と十二支の五行は必ず必要になります。

まだ覚えられていない方は、ぜひ覚えておいてください。

まだ、慣^なれてなければ、宿命をだしたときに、つぎのように、五行に置き換えて、書いておくとよいでしょう。

金 土 金
火 木 水

㊦ 人物の場所も、皆さん覚えましたか？



まだ覚えてない方は、覚えるようになさっておいてください。占うとき必ず必要になります。

㊦ 38回目【陰占宿命】 20⇒ 資料【陰占宿命】〔場所と人物〕も活用してください。

㊦ 令和天皇の宿命に戻ります。

19頁の【旺相休囚死法】の表で、旺相休囚死をだしていきます。

この方の宿命は、月支は寅木（とらぼく）です。

【旺相休囚死法】の表で、1番上の行の左に 月支 季節 と書いてありますが、そのすぐ右側に 寅 卯 と書いてあり

ます。その箇所を見ればよいわけです。

表を見ると、月支が寅の人は、木性『旺』と書いてあります。

この宿命は、月支のほかに木性ないです。木性がないですから

この方の宿命のなかには、『旺』になる人物はいない。ということになります。

『旺』になる人物がいなければいけない。という決まりはありません。

『旺』になる人物がいらないという宿命も当然あります。逆に『旺』になる人が何人もいます。そういう宿命も有り得ます。それがその宿命の個性なのです。

まずは、この方の宿命に『旺』はいません。

つぎに——2番目に強い『相』は火性です。火性が相になっています。

宿命全体をみると、(巳)^みが配偶者の場所にあります。

この巳^み火^びが『相』です。

この宿命に『旺』がありませんから、この宿命のなかで、1番強いのは『相』になります。

【旺相休囚死法】の表を見ると、木性のつぎは水性です。水性は休になります。

(年支)に子水という水性が1個だけありまして、母親の場所が『休』です。

つぎに——『囚』は土性です。

戊土という土性が、月干に1個だけありますから、この戊土が『囚』です。

最後の『死』は金性になります。

日干は辛金、年干は庚金なので、日干も年干も『死』になります。

このようにして「旺相休囚死」が割り振^ふられます。

旺相休囚死に慣れていない場合は、数字で番号つけるとよいとおもいます。

そのほうがわかりやすいかも……です。

☞ 令和天皇の宿命に、番号を振ってみます。

①旺 ②相 ③休 ④囚 ⑤死

⑤ ④ ⑤

辛 戊 庚

巳 寅 子

② ③

ここでは、すでに番号を振ってあります。

☞ この宿命を「旺相休囚死法」で占います。

この方は——自分自身が5番の『死』です。

『死』になっていますから1番弱いです。

旺相休囚死法はあくまでも家系のなかでの力関係を論じる技法



権力・発言権

40 ページに上記のように書きましたが、一家のなかで、権力とか、発言権が弱い人です。ということになります。

一家のなかで、権力とか発言権が弱い人だということと、
“運勢も弱い” それとはまったく別です。

旺相休囚死法で『死』になっているからといって、悪い宿命ではないのです。

一家のなかでの発言権が弱いです。ということは——
この人は我侷^{わがまま}をいわない人です。ともいえるわけです。
自分の希望よりも、ほかの人の希望を優先してあげる人
です。ともいえます。

それゆえに、『旺』になるのがよい。とは決まっていませ
ん。もちろん、悪いとも決まっていけません。

『旺』で、自分が1番という人は、一家のなかでは権力
が強いといえますけど、単なる我侷^{わがまま}が強いだけかも知れ
ないのです。

その意味で、5番『死』になるのが、悪いとは決まってい
ないわけです。

こういう人物は、自分の意見はあまり強く出しませんが……

ほかの人の意見を優先させてあげるようになります。

そのようにもいえるわけです。

そこでチョット、令和天皇の子供時代を考えてみます。

配偶者が『相』ですから、この方の宿命で1番強いのは
巳^み火^びです。火性です。

日支は配偶者（妻）の場所です。配偶者が『相』です。
つまり雅子様が『相』です。

子供時代に妻はいませんから、子供時代を考えるときは、
日支の配偶者の場所は除いて考えます。

配偶者を除いて考えると——この方の宿命では、家族の
なかで1番強いのは、3番の『休』です。

子水が3番で、子水は年支にありますから、そこは母親
になります。

つまり、結婚前・雅子様が妻になる前は、母親が1番強
いです。ということは——子供時代は、お母さんのいう
ことを、よく聞き分ける子供でした。

というふうに占うわけです。

自分が5番の**死**で、母親3番の**休**です。

こういう人物は母親の意見には逆らえないといえます。
逆らえないともいえるし、よくいえば母親の意見を素直
に聞くよい子供でした。そのようになります。

いかがでしょう……そんな感じをうけませんか。

年干の庚金は 5 番の死ですから、父親も『死』になっています。

皇太子自身も強く意見をだしません、父親も自分とおなじ 5 番の死ですから、その意味では同等といえます。それゆえに、父親（平成天皇）の意見をあんまり重視していませんでした。そのような子供だったと占えます。

母親のいうことはよく聞くけど、父親の意見に対して、どうなのかといえは……悪くいえば軽視しているとか、チョット軽んじている。そういう人になります。

天皇家でも人間の集団ですから、[たとえばの話として] つぎのような事象も起こり得るわけです。

子供の頃に、父親から「こういう手順でやっておきなさい」といわれたら、母親に相談するわけです。

母親にいちいち「お父さん……とっているけど、そうやっていいの……？」と、母親の許可を得てから、父親にいわれた事をやり始める。というようにです。

〔たとえば〕普通の家であれば、子供がおもちゃ買って欲しいと思うとき、欲しい物は、お父さんにいわないで、お母さんに頼むわけです。

お母さんあれ買っていい……？ お母さんの許可を得てから動く、そういう子供になっていきます。

宿命にはそう書いてあるわけです。

さて、このように観ておきまして、本人が結婚すると、配偶者の場所（日支）が埋まります。雅子様が座ります。

（日支）は、妻が座る場所なので〔妻座^{さいざ}〕という言い方をします。

誰でもそうですが、男性が結婚すると、いきなり（日支）に配偶者が座ります。

〔さきほど……結婚前・雅子様が妻になる前は、母親が1番強いです〕

このように書きましたが、結婚すると妻・雅子様が日支に座ります。

結婚する前は、空席だった場所が、人物（妻）によって埋まります。

結婚した途端に、2番目に強い『相』が妻座に座りました。

自分自身が5番の『死』で、妻が2番の『相』ですから、

当然、妻の意見を重視しますし、妻に頭が上がりません。
そういう人になっていきます。

結婚前は、母親のいうことをよく聞きわける子であった
のが、結婚したら、妻のいうことを優先して聞く夫にな
るわけです。

結婚前と結婚後では、子供は母親に先んじて、妻を優遇
するようになります。

☞ 少しここは難しいのですが、もう少し深く読むときは、
つぎのように観ます……。

結婚前は母親のいうことを、優先して聞く子供であった
わけですが、結婚すると、母よりも妻の意見を優遇する
ようになります。

長男がそのように変わってしまったら、お母さんの側か
ら見て、どのように思うでしょう？

一般的に考えて、このお母さんは、子供の妻をどう思います？

子供を取られてしまったように思いますよね。

普通は、面白くないでしょう、

こういう宿命は、特に――嫁・姑の問題が起こりやすい

のです。

「雅子を護ります」皇太子はそういう宿命です。

結婚した途端にお母さんより、妻のいうことを聞くようになってしまうのですから、母にしてみれば面白くないでしょう。

妻のほうは、面白いとか、面白くないとか、思わないでしょうけど、母親から見れば、この妻の存在は〔目の上のたんこぶ〕ですよ。美智子様も人間ですよ。

父親の昭和天皇は、もともと5番の『死』ですから……
どっちがどっちでもいい話です。

うちの息子は、自分のいうことを、あまり聞いてくれない、母親のいうことばかり聞いている。そのように最初から思っているわけです。

そんな状態ですから、子供が妻のいうことを聞くようになって、父親にとってはあまり関係ないのです。

最初から、自分のいうことは、聞いてくれない子供です。

しかし——こういう場合は、母親にとっては大問題です。
家から出て行ってしまいう次男とかでしたら、まだしも、

跡継ぎの子供です。

嫁が来たとたんに、嫁のいうことばかりを優先するようになってしまったら、子供の母親からすれば、この嫁は面白くないはずです。

——皇后様もそう思っていると^{おも}思います。

もちろん、マスコミなどで表面には出ないでしょうけど、皇后様としては面白くないですよ。

皇太子様が、雅子様の病気について、「人格を否定するような動きがあった」と、報道関係者に苦言を呈したことがありました。

この義母は、子供が雅子さんをそれほど大事におもわなくてもいいのに……つまり、世間に対してまで、そのようことを告げなくてもいいのに——そのように考えていたのではとおもえます。

妻の人格なりを否定されるようになると、皇太子様自ら報道関係者に苦言をいう事態になるわけです。

それは、妻が2番の『相』だからです。

自分自身は5番『死』ですから、自分の問題とかであれ

ば文句をいわない人物です。

このような感じで「旺相休囚死法」を読んでいけばよいのですが……もう少し難しくなってゆきます。

「旺相休囚死法」で、皇太子様の宿命で観ていきますと、父と母では、母のほうが強くて、母より妻のほうがより強い、そのように書いてありました。

しかし、実際に妻の宿命とか、母親の宿命をだしますと、母親の宿命に〔いままで話してきたとおり〕そう書いてあるとは限らないのです。

つまり、夫の宿命には〔妻が強い〕と書いてあっても、妻自身の宿命をだすと〔私は弱い〕と書いてある宿命かも知れないのです。³

雅子様の宿命だして観ると、そういう風になっているのかも知れないのです。

そうだとしたら、どういうことになってしまうのか……実は——その部分が、占うときの大事な考え方になるところなのです。

☞ 宿命をならべました。

1963 (s38) -12-9

1934 (s9) -10-20

1933 (s8) -12-23

雅子妃

美智子皇后

平成天皇

丙 甲 癸

甲 甲 甲

癸 甲 癸

戌 子 卯
冬子 戌 戌
秋亥 子 酉
冬**4 2 1**
囚 相 旺**5 5 5**
死 死 死**1 2 1**
旺 相 旺

丙 甲 癸

甲 甲 甲

癸 甲 癸

戌 (子) 卯

子 (戌) 戌

亥 (子) 酉

死 相
5 2囚 旺
4 1旺 休
1 3

さきほど皇太子様の宿命で、一家の家族関係について、観ました。そこで、父親5番『死』になっていました。皆さんが一番戸惑いやすいのは、この部分ではないかとおもいます。つまり、皇太子様の宿命で父は5番です。ところが……父親の宿命だと「私は旺1番です」と、書いてあるわけです。

皇太子様の宿命では、父は5番のはずなのに、父親の宿命をだしてみたら、自分自身が1番です。となっています。

これはおかしいじゃないか、とおもったり、どのように観たらよいのか、そのようになりやすいかと思いますが、これは少しもおかしくないのです。

このようになっていることが、当たり前なのです。

⇒ そこで順番に説明していきます。

平成天皇の宿命から考えます。

皇太子様とおなじように……平成天皇の子供時代を考えますと、この方は自分が1番です。

自分が1番だから、一家のなかでは強い子供です。

子供の場合、一家のなかで強い子供というのは、どうしても我侘^{わがまま}な子供になりやすいのです。

特に長男に生まれたりすると、よけいに、自分が1番だとおもうわけです。しかも、そのように書いてあります。

そうしますと、当然ですが、我侘な子供になります。

しかも、天皇家の長男です。

子供時代には、母親（良子皇后 ながここうごう）は3番になっていますから、母親のいうことはあまり聞かないです。

しかし、父親（昭和天皇）は1番です。

それゆえに、平成天皇は子供時代に我侷な子供だったとしても、父親（昭和天皇）にだけは、一目置いていました。そういう子供だったのでしょう。と占うのです。

そして、大人になって、美智子様と結婚しました。

その妻は「日干」甲木で、（月支）は戌月の宿命でした。すると、美智子様の（日支＝夫の場所）は4番『囚』と書いてあります。

平成天皇ご自身は、もともと自分が1番だという宿命なのに、妻の宿命のなかでは、夫は4番です。

そう書いてあります。

これおかしいじゃない、と、思うかも知れませんが、これはおかしくないのです。

☞ それは——つぎのように考えるのです ➡

☞ それは——つぎのように考えるのです。

美智子様と結婚すると、平成天皇は運勢の上で美智子様の（日支=夫の場所）に、座らされることになるのです。自分の宿命では「旺」で1番だろうと、美智子様のような宿命をもつ、奥様をもらったわけです。

美智子様の夫になったのですから、美智子様の宿命のなかにある夫の場所、つまり、美智子様の（日支）に運勢の上で座らされることになるのです。

そうしますと、もともと1番『旺』で、少し我侘な子供だったわけですが、結婚したら4番「囚」の椅子に座られます。それゆえに、結婚すると、平成天皇のチカラは弱くなるのです。

平成天皇ご自身は、もともと1番ですけど、結婚したら4番の場所に座られます。

ここの考え方として……1番が4番に座らされることになりますから、1番と4番の間ぐらいの2番か3番位、そのぐらいの強さになってしまう。

このように考えるのです。そして、子供が生まれたら ➡

【旺相休囚死法】 旺① 相② 休③ 囚④ 死⑤

1933 (s8) -12-23

1934 (s9) -10-20

平成天皇

美智子皇后

癸 甲 癸

甲 甲 甲

亥 子 酉

子 戌 戌

水 木 水

木 木 木

水 水 金

水 土 土

① ② ①

⑤ ⑤ ⑤

① 冬 3

4 秋 ①

1960 (s35) -2-23

1963 (s38) -12-9

皇太子・浩宮

雅子妃

辛 戊 庚

丙 甲 癸

巳 寅 子

戌 子 卯

金 土 金

火 木 水

火 木 水

土 水 木

⑤ ④ ⑤

④ ② ①

② 春 ③

⑤ 冬 ②

そして、子供（浩宮様）が生まれたら、この子の父親になります。

その子供（浩宮様）の宿命を見ると、父親の場所は5番と書いてあります。〔前頁の表を参照ください〕

子供が生まれると、この子（浩宮様）の「年干＝父の場所」に座らせられることになります。

皇太子の「年干＝父の場所」には、5番『死』と書いてありますから、この子が生まれると、余計に弱くなってしまうわけです。

もともと1番『旺』だった平成天皇は、美智子様と結婚したために、4番『囚』の椅子に座らされてしまうのでその分チカラが弱くなってしまい、家のなかでの発言権も弱まってしまいます。

さらに――皇太子のような子供が生まれると、この子の父親の場所に座られることになってしまいます。

そこは5番になっています。

この子が生まれると、なお弱くなってしまうのです。

そうしますと、どなたでも、誰と結婚するのか、どんな子供が生まれるかによって、一家のなかにおける自分のチカラが、本来よりも〔強くなったり〕〔弱くなったり〕するわけです。

平成天皇とおなじ生年月日の人物でも、どういう宿命の人と結婚するのかによって、家庭のなかのチカラ関係はさまざまな姿になります。

美智子様のような宿命の女性を妻として迎えると、夫になる男性は4番『囚』の椅子に座ることになります。

それゆえに、チョット弱くなってしまうのです。

しかも、それに加えて、浩宮様のような宿命の子供が生まれると、5番『死』の椅子に座ることにもなってしまいうために、もっと弱くなってしまいうわけです。

多分……平成天皇ご自身は、子供の頃には我儘に育ったのに、結婚してからは、言いたいことも控えて、我慢するようになってきて、子供が生まれて、なお我慢しなくてはいけない。ということになってしまったというふうな、人生の変化を送って来られてとおもわれます。

⇒ 家族の一員として、子供が何人生まれるのかわかりませんが、子供のなかでは“跡継ぎの子供”ほとんどの場合は長男だと思いますけど、跡継ぎの子の宿命が一番親に強く作用します。

お子さんがいらっしゃる方は、子供が何人いても、跡継ぎの子供に焦点を当てて——私が母親だからどうだとか、夫は父親の場所に座らされると強くなるとか、弱くなるとかというのを、長男の宿命で観るとよいでしょう。

⇒ つぎに、美智子様には焦点をあてて観ていきます。

美智子様自身の宿命では、自分が5番で大変弱いです。

子供時代は我儘をいわない子供ですね。

自分の意見は強く出さない……それでは誰の意見を一番聞くのかといえば、母が1番になっていますから、当然母親です。

彼女は結婚するまで——いや結婚に関しても、母親のいうとおりに生きて来たと思えます。

ところが、平成天皇と結婚したので、平成天皇の宿命のなかの妻の場所（日支）に座らされることになります。

夫の宿命の妻座さいざに座ります。

その妻座は平成天皇の宿命のなかで、1番『旺』です。

美智子様はご自身の宿命のなかでは、5番『死』で最弱であったのですが、結婚した途端に、『旺』の場所に座らされることになったわけです。

それゆえに、美智子様は結婚してから強くなったのです。平成天皇と結婚したために——いやでも強くならざるを得なかったわけです。そのようにもいえます。

最弱の⑤からいきなり、最強の①の場所に座りました。

そして、子供（皇太子）が生まれたら、子供の宿命のなかでは、母親の場所に座られます。3番『休』です。

皇太子様に、お嫁さんが来るまでは3番ですから、一家のなかでは一番強いわけです。

そうしますと、つぎのように入えます。

美智子皇后様は、天皇陛下の『旺』とは反対に、最初は『死』であったのに、天皇陛下と結婚したことによって1番の場所に座らされて強くなり、長男が生まれてからさらに強くなりました。このようにいえるわけです。

「旺相休囚死法」は〔強ければよい〕と、いうものではありません。

運勢の強さとは別ですよ、と、先ほども書きましたけど

「旺相休囚死法」で〔強い〕

「旺相休囚死法」で〔弱い〕

} 運勢の強弱ではない

「旺相休囚死」の強弱が、運勢をあらわしているわけではないのです。

⇒ 美智子様はもともと5番『死』でした。その人が結婚して、いきなり1番の場所に座ることになりました。

そういう立場になると、ふつう——どのように感じるようになるのでしょうか。

もともと、^{じっか}実家のなかでは、お母さんのいうことを良く聞いて、お母さんのいうとおりに生きてきた女性です。

〔旺相休囚死には、そのように書いてあります〕

結婚前は、母親のいうとおりに、物事をやっていけばよかったのですが、結婚したらいきなり1番の場所に座られました……そうなる、自分の意見を明確に出さなくてはいけなくなります。

1番『旺』の座は、^ぞ一家のなかで“強くしっかりしなくて

はいけない” そのような場所です。

そうしますと、もともと最弱の女性が、結婚した途端に最強の場所に座ざしたということは、相当な負担がかかるようになります。

大変なストレスです。しかも天皇家です。

もともと弱い人が強い場所に座る



負担

もともと弱い人が強い場所に座ると、これはかなり負担になります。

その反対に——もともと最強の人が、最弱の場所に座らされると、どうなるでしょう。

もともと強い人が弱い場所に座る



負担

そう、不満です。

☞ 平成天皇はもともと『旺』です。

1番なのに、結婚したら4番の場所に座られました。
もともと、自分の発言権を強く出していた人があったのに、出してはいけない、といわれるようなものです。

当然、不満になります。

それゆえに、平成天皇は結婚してから、自分の意見を強く出せなくなり、おそらく不満が多かったと想えます。

もともと5番だった皇后様が、結婚したら1番の場所に座られたものですから、すごく負担になります。

平成天皇の妻の座『旺』、これはもう、座っているだけで負担になります。

本来、美智子様はおとなしい、^{ひか}控えめな環境を好まれる方であったのに、皇后の座についた途端、まわりから頼りにされ、^{みずか}自ら強く周囲の人間を、引っ張って行かなければならない。という立場に^{すわ}座らされて、非常に負担が多くなったと想います。

☞ 雅子様はどうでしょう。

もともと雅子様は4番『囚』です。これも弱いです。

一家（実家）のなかでは、父が1番で、母が2番と書いてありますから、この方も子供時代は両親の意見をもっとも重視して、生きてきたといえます。

お父さんが外交官なので、雅子様も外交官になりたくて外務省に入ったわけです。

雅子様の「旺相休囚死」〔60頁参照〕は、4番『囚』ですから、一家のなかで一番弱いです。

彼女の配偶者の場所（日支）は5番『死』ですが、結婚するまでは空席なので、5番はいません。

皇太子が雅子様と結婚すると、皇太子は彼女（日支）に座ることになります。

（日支）5番に座ることになります。

雅子様は、結婚したことで、皇太子様の宿命のなかでは、妻が1番と書かれている配偶者の場所に座ります。

皇太子の宿命のなかで（日支）巳火は、2番の『相』ですが、皇太子の宿命のなかでは、一番強いわけです。

その場所に雅子様^が座しますから、皇太子の宿命のなか

1 番強くなります。それが妻となった雅子様です。

彼女も結婚するまでは、一家で一番弱かったわけですが、結婚したら、一家で一番強い場所に座られました。

これも相当な負担になります。

大変に体調が悪い時期がありますが、精神的に落ち込んだ原因の一つが負担の大きさだといえると思います。

皇后様も結婚後、何年かした^{あた}辺りで、相当に体調がおもわしくなく、精神的に落ち込んでいるような……そういう時期ありました。

ちょうど、それとおなじようなことを、雅子様は経験したわけです。

☞ そうしますと、皇太子様はもともと 5 番です。

そして、雅子様と結婚したら、夫の場所はおなじく 5 番です。この姿は相変わらず弱いままですけど、もともと 5 番『死』の人が、5 番の場所に座るのは、むしろ気が楽です。いままで通りにやっていたらいいわけです。

皇太子様は雅子様と結婚して楽ですし、むしろ強い妻が来てくれたと思って、妻を頼るようになります。

しかし、頼りにされた雅子様としては、もともと4番で弱かったのに、強い場所に座られていますから、それ事態が負担です。

それに加えて、夫に頼られたらどうでしょう。

このように占っていくわけです。

おわかりいただけたでしょうか……。

どなたでも、まわりの人達の影響を受けます。

つまり、どのような親元で育ったのか、そして結婚したり、子供が生まれたり、これらの事象によって“チカラ”が、強くなったり、弱くなったりするのです。

ご自分、あるいはお知り合いのご家族の宿命で、「旺相休囚死法」の観方を練習なさってください。「旺相休囚死」の力関係はあくまでも、自分の宿命のなかで話しだということです。

山田さん一家の宿命のなかでの強弱と、大竹さん一家のなかの宿命の強弱と、それらは比べられないのです。

ただし、④さんと、⑤さんが、結婚した場合は、相手の配偶者の場所にそれぞれが座られます。

そこで初めて、強いか弱いかという話ができるわけです。

少し難しいですけど、わかるようになってきます。

⇒ 参考までに――。

美智子様が、当時の皇太子と、結婚すると決めたのは、美智子様の母親の意見です。という言い方ができます。母の意志によって決めた。というように観えます。母がダントツに強い一家です。ゆえに母親中心の家……そのように美智子様がおもっていたということです。美智子様にとって、正田家で一番強いのは母です。

⇒ 長男、次男、三男、あるいは長女、次女、三女と生まれてくれば、その時々で、チカラ関係が変わって来るのが読めるわけですが、家系の話だけで納める^{おさ}場合には、長男を主として考えてください。あるいは、跡継ぎを主としてください。

このように、家族の姿というのは、お互いに影響し合います。

宿命には、親の場所とか、配偶者の場所とか、その場所が決まっていますから、そこに入る人達との関係で観ていきます。

愛子内親王 2001(平13)-12-1

戊	己	辛	愛子様は、父の場所が3番です。
戊	亥	巳	
	冬		
土	土	金	
土	水	火	
5	5	3	
死	死	休	
戊	己	辛	
戊	(亥)	巳	
死		囚	
5		4	

愛子様の宿命で観ますと、やっと皇太子殿下が強くなりました。いままで、自分は5番で、結婚して雅子様の夫になっても5番だったわけです。

家のなかで自分の意見は出さないし、通らないと思っていた人物ですが、愛子様が生まれて、その宿命のなかでやっと3番です。

愛子様が生まれてから、お元気になられたのではありませんか。強くなられたのではありませんか。

☞ 愛子様の夫の場所（日支）は、5番『死』ですから、ここに座る人物は、相当に大変だと想います。

民間から来るしかないのでしょうけど、あらかじめ5番の椅子が用意されています。

愛子様も5番ですが、愛子様は元々天皇家の人間ですから、天皇の娘が妻ということは、普通に考えても、夫は小さくなりそうです。

稚子様も皇太子様も、「旺相休囚死法」で自分たちと愛子様の関係だけを考えると、自分たちの宿命のなかでは子供のほうが強いです。

稚子様の宿命のなかで、自分は4番『囚』、愛子様は2番『相』です。

皇太子様の宿命のなかで、自分は5番『死』、愛子様は4番『囚』です。

この姿は子供が生まれると、よくいえば——夫婦ともに子供を大事にします。悪く出ると——子供に振りまわされます。そういうご夫婦といえます。

自分よりも子供が強いわけですから、子供を大事にするか、それとも子供に振りまわされる。という状況になり

やすいのです。

これは通常、子供が大きくなればなるほど、振りまわされる度合が大きくなります。

このことは、一般の場合でも、考え方はおなじです。

平成天皇は、自分より子供のほうが少し弱いです。

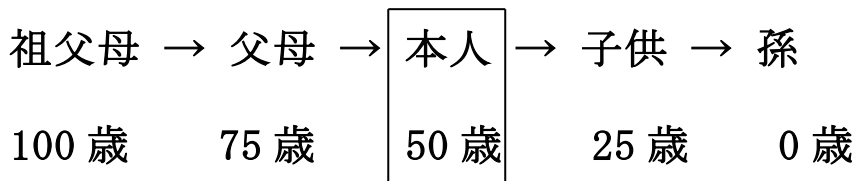
皇后様は、自分と子供がおなじです。

お二人とも子供のほうが強いということではないので、子供に振りまわされません。

親子関係はこのように観ていきます。

⇒ 家系と旺相休囚死法

「旺相休囚死法」を、家系そのものに、当てはめる考え方があります。



このように、祖父母から孫まで〔25 歳〕違いで、家系を書きました。年齢は目安ですが、仮に現在、本人〔50 歳〕という人がいるとします。

祖父母は〔100 歳〕生きていますかどうか、わかりませんが、生存していると仮定して考えます。

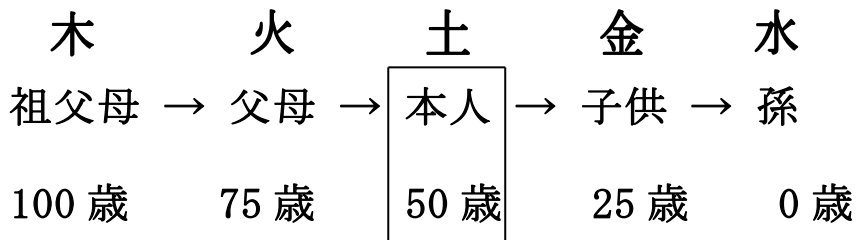
子供は〔25 歳〕で、さらに孫がいて、その孫はまだ生まれたばかりの〔0 歳〕です。

このような五代にわたる一家があったとします。

算命学では、家系の流れを占う技法がいくつかあります。

そういう場合には、家系にとって、一代目の人、二代目の人、三代目の人、というように当てはめていきます。

ときには——下記のように、五行（木火土金水）の順番に当てはめて、物事を考えていきます。



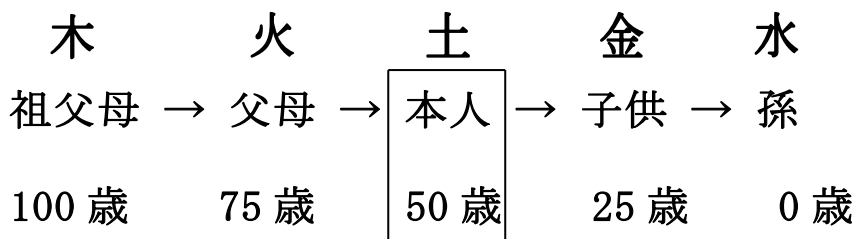
祖父母（木性） 親（火性） 本人（土性） 子供（金性） 孫（水性）

上記のような、親子五代にわたる家系があるとすれば、このなかで、^{いま}現在、一家の大黒柱と呼べる代は、どの代なのといえ、年齢から考えて、通常は「本人」です。

親は〔75歳〕ですから、すでに引退しています。

子供は〔25歳〕なので、まだ若いです。

一家のなかで、大黒柱といえる一家の中心的存在といえるのは、50代の本人です。本人が『旺』になります。



旺①

いま、一家の大黒柱といえるのは、50 代の本人 の代で、「旺相休囚死法」でいえば、1 番強い『旺』です。

このように考えます。

ただし、このことは、本人自身の宿命が『旺』なのか、それはわかりません。

そのことは別に、誰でも、一家の中心的存在になれば、一家を背負って立ち、引っ張っていかなければいけない時代があるわけです。

たとえば——自分の宿命が家族のなかで弱くても、一家を引っ張って行かなければいけない状況に立たされるはず
です。

誰でも一般論で、この年代になれば『旺』のような役割を与えられますよと……算命学では考えています。

そうしますと、この場合『旺』として、割り当てた五行は土性です。土性が旺だとしたら、2番目に強いのは、どれになるのかといえは金性です。このことは下記の表「旺相休囚死法」を見て確認するとよいでしょう。

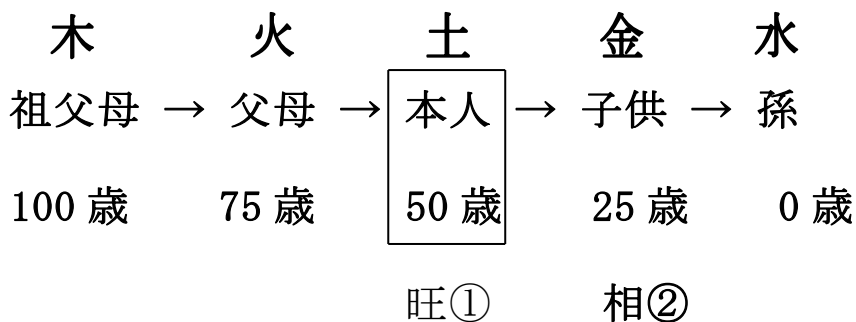
五行の土性はここで、金性は2番目

旺相休囚死法 …… 季節の時間と空間の力関係

月支 季節	寅 卯	午 巳	辰 戌 未 丑	申 酉	子 亥
旺	木性	火性	土性	金性	水性
相	火性	土性	金性	水性	木性
休	水性	木性	火性	土性	金性
囚	土性	金性	水性	木性	火性
死	金性	水性	木性	火性	土性

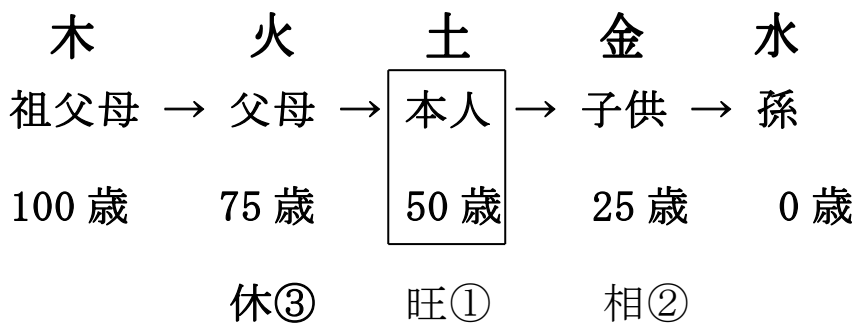
さて、そうしますと……

本人は現在〔50 歳〕なので、旺①と想定したのですが、五行で土性が旺だった場合は、自動的に金性が2番目に強い相②になるはずです。



3番目の『休』は誰になりますか？

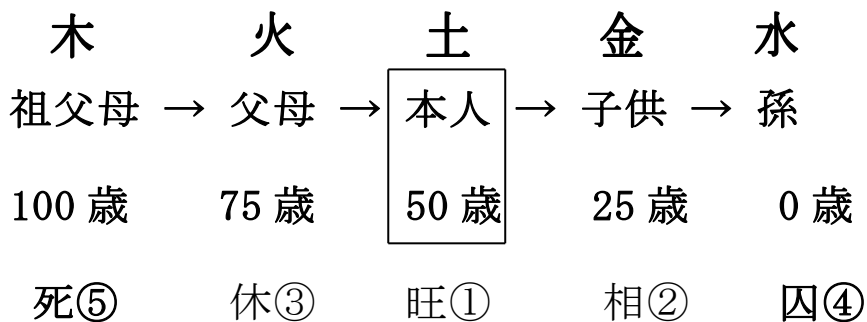
そう、火性です。土性が旺の場合には、火性は自動的に休③になっているはずですよ。



4番の『囚』は水性です。孫が囚④ですよ。

1番弱いのが〔100歳〕の祖父母で死⑤になります。

この順番は算命学で考える家系のなかの理想型ですよ。



① 家系の理想型

どの家でも、㊤のとおりになるとは限りませんが、この順番が最も自然の法則に合った姿です。

こういう力関係で一家が成り立つことが、家系の理想型であり、自然界に最も合った姿だと考えています。

いま——本人が何歳でもよいのです。

ここに書きましたのは、目安ですから、当然個人差はあるかとおもいます。

いま——〔60 歳〕で『旺』の時代だという人も、おられるでしょう。

年齢が〔50 歳〕でも〔60 歳〕でも——現在の自分は『旺』の時代であり、自分が『旺』であれば、子供は『相』の場所にいなくてはならないのです。

そして、〔75 歳〕の親よりも、つぎの代を担う〔25 歳〕の子供のほうが、頼りになる存在にならないといけなわけです。これが理想型だと考えています。

㊤は理想型だということですが、世の中のすべての家系が、これと同じ型とは決まっています。

理想型から、大きく外れている家系もあるはずで

Ⓐを見てわかるように、3 番目〔休③〕にしっかりしている人物は本人の親です。

そして、4 番目〔囚④〕が孫になりますと、1 番弱いのが〔100 歳〕の祖父母〔死⑤〕になります。

そういうチカラ関係が一家のなかに出来ていると、その家系はさしさわりなく、続いて行くことになります。

家系の理想型という意味は、Ⓐの姿になっている家系であればしっかりします。

さらに円滑に続くようになると考えています。

⇒ 家系の姿を観るには、人物の宿命を見なくてもわかります。〔たとえば〕三代でも、五代でも、続いている家があるとします。「あそこの家はいつまでも、歳とった親が権力を握っていて、いつまでも子供がしっかりしない」という家があったら、その家系の運気は将来下がっていくはずである。と占うことになります。

すべての家が、ぴたりと理想型Ⓐとおなじというわけにはいかないでしょうけど、ただ、できるだけⒶに近い姿が

よいのです。

もっとも、現在の家族構成において、五代も存在している家系はあんまりないと思います。

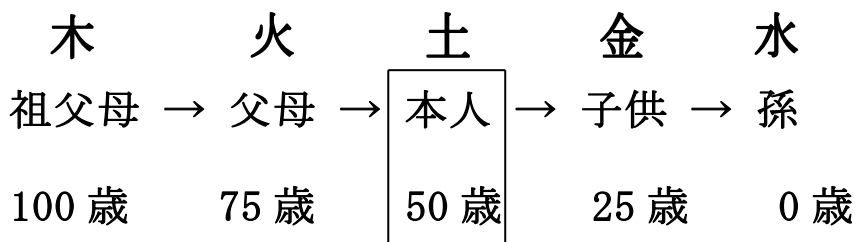
実際はせいぜい三代位まででしょう。

ですから、親子三代で現在一緒に暮らしています——、
という家系があれば、ここの三代だけを観て、理想型に近いのかどうかを判断すればよいのです。

理想型から外れていれば、外れているほど、家系自体が衰えていくようになります。

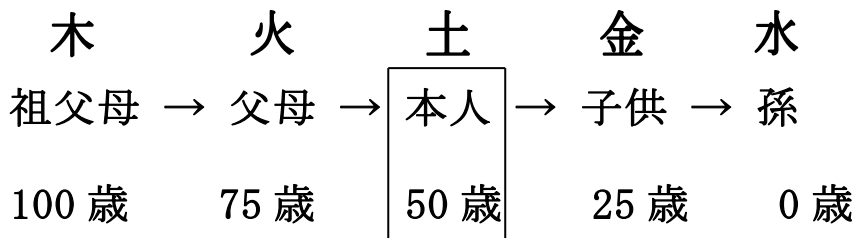
さきほど——76 頁の上方と下方に、本人〔50 歳〕と設定して、下記のように書きました。

上方は



祖父母（木性） 親（火性） 本人（土性） 子供（金性） 孫（水性）

下方は

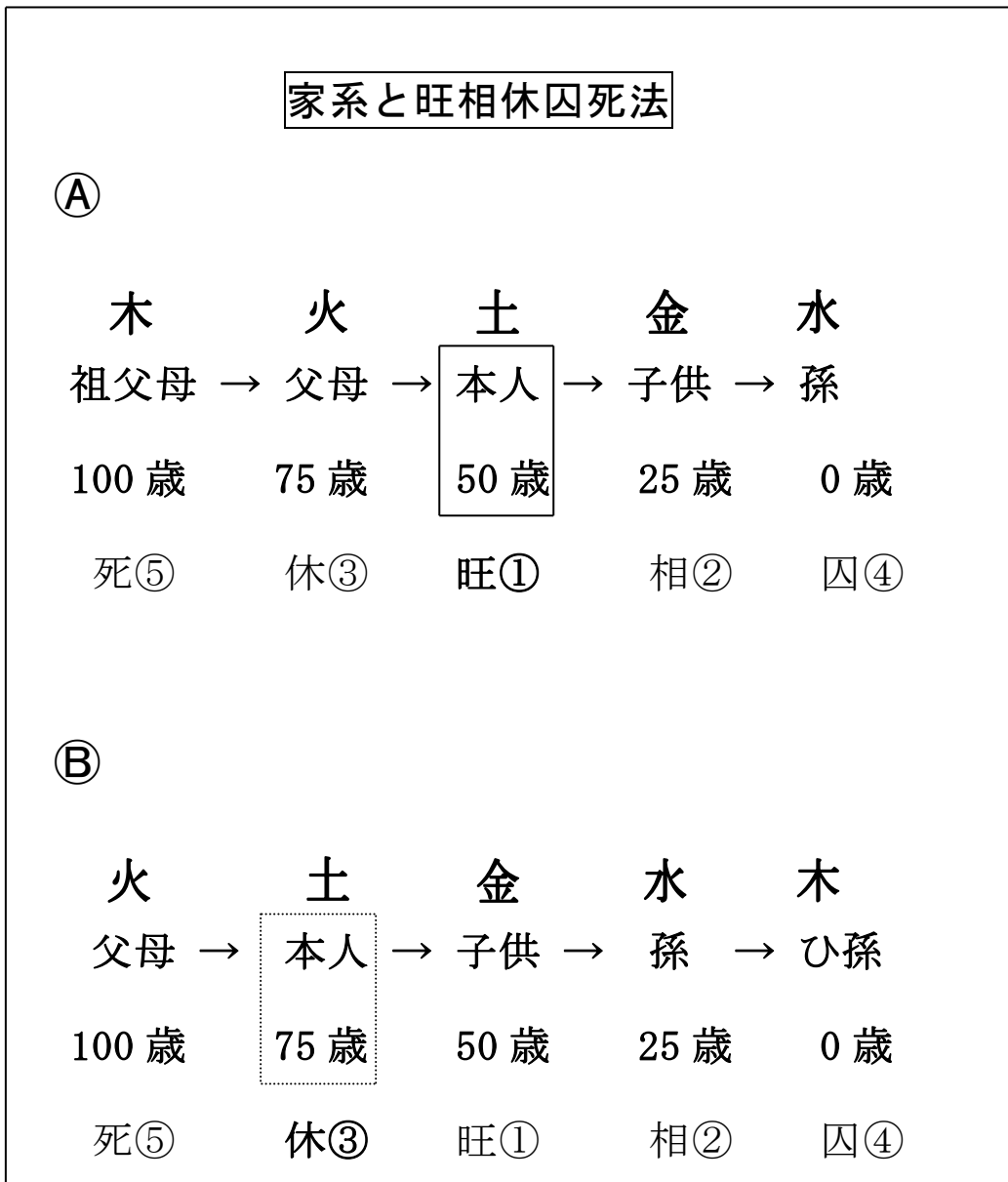


旺①

上方も下方も、本人〔50 歳〕と設定したわけです。

つぎのページに 家系と旺相休囚死法 と書いた表があります。そこに書かれた①は上方と下方とおなじ姿です。

〔たとえば〕 本人 25 年後の姿を②として書きました ➡



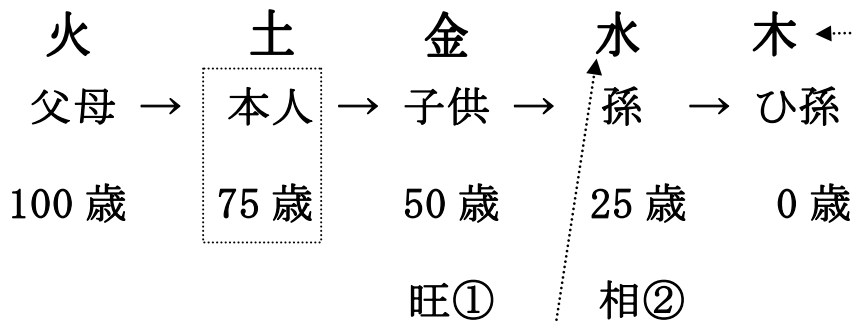
〔たとえば〕 本人 25 年後の姿ということで作りますと、
 Ⓑのように、本人は〔75歳〕になっています。

〔25歳〕だった子供が〔50歳〕になっています。

孫は〔25歳〕になっています。親は〔100歳〕です。

ひ孫が生れているかどうかわかりませんが、いるとすれば〔0歳〕になります。25年経過すると年齢が変わります。

五行はおなじですから、本人が土性と先ほど当てはめましたので書きますと、下記のようにになります。



子供が金性、孫は水性、そしてひ孫へと木火土金水の順番に並べて行きますので、水性まできたら、また木性に戻りますから、本人の親は火性です。

この五行の循環は変わりませんが、ただ『旺』になる場所が25年前とは違います。

25年経ちますと『旺』になっている代は〔50歳〕の子供です。子供が一家の中心になっているはずですが。今度は子供の金性のところに旺①とおきます。

金性を旺①とすると、自動的に水性が相②となります。

そして、土性が休③、木性が囚④、火性が死⑤です。

その姿がⒷなのです。 ➡

②

火	土	金	水	木
父母 →	本人	→ 子供	→ 孫	→ ひ孫
100 歳	75 歳	50 歳	25 歳	0 歳
死⑤	休③	旺①	相②	囚④

② 家系の理想型

子供が 1 番、孫が 2 番、本人が 3 番に下がります。

ひ孫が 4 番、親が 5 番です。

84 頁 家系と旺相休囚死法 にも、①と②の姿が書いてあります。

金性が『旺』という順番になることを、確かめて頂けるとよいとおもいます。

年代は変わっても、この順番は①とまったくおなじ順番になるはずですよ。

『旺』になる代があるとするならば、『旺』のつぎの代が 2 番『相』にならなくてははいけないのです。そして、『旺』の 1 つ上の代、つまり親の代は、3 番『休』にならなければはいけないのです。

⇒ 25年前は、本人 が1番『旺』だったわけです。

1番の人が引退したら、2番『相』になるのではなくて、

3番『休』まで下がらなくてはいけないのです。

そうしないと、家系の未来はしっかりしません。

つまり、世代交代ですね。

1番だった人がいつまでも1番でいたり、いつまでも2番でいたりするために、2番になれるはずの人が2番になれないわけです。

1番だった人が3番まで下がれば、自動的につぎの代は強くなります。その意味も含めて、家系の理想型なのです。

このようなチカラ関係が一番自然な姿であり、基本みたいなものです。

この姿を土台にした上で、個人個人の強さ、運勢を加えて考えていくものでもあるのです。

一家のなかで強さを観ていくのが「旺相休囚死法」の主たる観方ですが、運勢を観るうえで、ここでの考え方を応用してつかうようになります。

【初年】 39 回目【旺相休囚死法】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 40 回目【十二大従星力学①】です。